

# 『選擇集』第四章 三輩念佛往生篇の理解

兼 岩 和 広

## 【抄録】

『選擇集』第四章の文章は、廃助傍の三義の中、傍正の義が理解し難いなど、全体的に章の主旨を明確に捉えにくい。そもそも章題である「三輩念佛往生之文」の語にしても、この短い文だけでは第四章がいったい何を説くために記された章なのかを明確に知ることができない。そこで『選擇集』以前の法然文献との比較や、『選擇集』の草稿本である「廬山寺本」の状況検討を通して、本文の明確な主旨を捉えた結果、『選擇集』の本文には三輩各々について差別があるという旨の解釈が記されておらず、そのことによつて理解を困難にしていることが明らかとなった。よつて、この旨を加えて第四章の内容を判断すると「三輩段に念佛と諸行が説かれるが、浄土往生の立場からすれば念佛往生のみを用いるべきであり、さらにその三輩の差別を知り、己の機と照らしあわせ、機に叶つた念佛を分別すべきである。」という理解ができる。

キーワード…『選擇集』第四章、三輩段、念佛と諸行、傍正の義

『選擇集』第四章 三輩念佛往生篇の理解（兼岩和広）

## はじめに

三祖良忠は『決疑鈔』において、『選擇集』各章には各々次第があるとし、各章の生起を記している。それらの中、第四章については、「若し本願を知らば、衆機の通行を知る可し。故に三輩を明かす<sup>(1)</sup>。」と述べている。第一章で聖浄二門の教判を明かし、第二章で正助二行の行義を明かし、第三章で本願を明かしてその根拠を示した。そしてその後記される第四章三輩篇は、遍く衆生に通じる行であることを明かすために三輩段について説かれた章である。と良忠は解釈している。

ところが、この第四章の実際の文章は、廃助傍の三義を説く中、特に傍正の義において理解し難い内容となつている部分が見られることもあり、章の主旨を明確に捉えにくい。そもそも章題である「三輩念佛往生之文」の語にしても、この短い文だけでは第四章がいったい何を説くために記された章なのかを明確に知ることができない。

そこで本稿では、第四章三輩篇が、いったい何を述べんが為に説かれた章であるのかということを、様々な手段を用いて明らかにしていく。

主な手段としては、『選擇集』執筆以前のものとされる法然文献から『選擇集』執筆時に内容的に参照された手控え資料を想定し、それらとの比較や、『選擇集』の草稿本とされる「廬山寺本」の状況から執筆状況を説明し、執筆当初の形態と修復後の文章との比較、そしてさらには、『選擇集』第四章の本文を詳細に検討していくことによって、第四章全体の意味をとらえ、第四章三輩篇が何を述べようとしているのかを明らかにしていく。

## 章題に関する問題

そもそも『選擇集』各章の冒頭には章題とされる文章が記される。それぞれ十〜二十数文字の文章となっているが、第四章の「三輩念佛往生之文」と第五章の「念佛利益之文」については、短い文ゆえに他の章題と比べて若干の違和感を覚える。他の章の如く主語述語を加えた文章的な表現にすることはいくらかでも可能なはずである。例えば第五章について言えば、「衆生、念佛に利益が有ること知るべきことを記す文」などという表現にしてもらえたならば、内容的により分かりやすいものになっていたはずである。にもかかわらず、なぜ短い章題としたのであろうか。さらに第四章について言えば、短い章題故に、その主旨となる真意を明確に知ることができない状況となっているの

である。単純に書き下せば「三輩念佛往生の文」であるので、例えば以下のような解釈ができてしまう。

・『無量寿経』三輩段はその全てにおいて、念佛による往生のことが説かれていることを明かそうとしているのが主旨  
 ・『無量寿経』三輩段で説かれる全ての念佛によって、往生が可能であることを明かそうとしているのが主旨

・『無量寿経』三輩段で釈尊が言いたかった真意は、念佛による往生であることを明かそうとしているのが主旨

このように、「三輩念佛往生の文」という文字だけでは、いくつもの解釈ができてしまう。見方をかえれば、この章題の主旨を明確にすることによって、第四章の内容の正しい理解ができるのではないだろうか。そこでこの章題の意図を探るべく検討をしていくこととする。

## 第四章の内容と成立状況の確認

まずは、この章の内容を確認しておきたい。

### ＜内容構成＞

聖典版テキスト書き下し該当箇所

- |         |                   |            |
|---------|-------------------|------------|
| ① 章題    | 三輩念佛往生之文          | (123 + 11) |
| ② 引用段 1 | 『無量寿経』上輩          | (123 + 12) |
| ③ 引用段 2 | 『無量寿経』中輩          | (124 + 8)  |
| ④ 引用段 3 | 『無量寿経』下輩          | (124 + 16) |
| ⑤ 私釈段 1 | 問答①何故念佛なのか↓『観念法門』 | (125 + 6)  |

⑥私釈段 2	問答②なぜ余行を捨てて念佛なのか↓三意	(125-13)
⑦私釈段 3	諸行を廃し念佛に帰すことを明かす	(126-1)
⑧私釈段 4	助成念佛の為に諸行を説く	(126-16)
⑨私釈段 5	念佛諸行に三品あることを明かす	(127-12)
⑩私釈段 6	廃助傍の義を明かす	(128-5)
⑪私釈段 7	問答③九品三輩は開合の異	(128-13)

引用段において『無量寿経』三輩段の全てを引用し、その後私釈段において問答形式で解釈が展開されていく。初めの問答では

私に問うて曰く、上輩の文の中に、念佛の外にまた捨家棄欲等の余行有り。中輩の文の中に、また起立塔像等の余行有り。下輩の文の中に、また菩提心等の余行有り。何が故ぞただ念佛往生と云うや。<sup>②</sup>

として、「何故諸行ではなく念佛往生と言うのか」という質問を設ける。これに対する答えとして善導の『観念法門』を引用し、三輩ともに念佛往生を勧めていると説く。

しかし、「この釈いまだ前の難を遮せず。」として、再び詳細な答えを求め、その答えとして三意が説かれるのである。

- ・ 一には諸行を廃して、念佛に帰せしめんが為に、諸行を説く。
- ・ 二には念佛を助成せしめんが為に、諸行を説く。
- ・ 三には念佛と諸行との二門に約して各三品を立てんが為に、諸行を説く。<sup>③</sup>

後にこの三つを廃助傍の三義に当てはめるのであるが、そこに文章の

解釈が困難であるという状況が発生してしまうのである。そのことに関しては後に述べることにするが、この章の中心となっている二つの問答の内容を見れば、この章の内容は、「三輩段には諸行も説かれるが、あくまでも念佛が最要である」ということを明かそうとしている旨を伺い知ることができる。

しかし、ここで疑問が起る。それは、そもそも第一の問いにある「何が故ぞ念佛往生と云うや。」という語である。意味をとれば、「どうしてただ念佛往生のみを要とするのか?」という解釈になるであろう。ところが、『無量寿経』三輩段の経文においては、「念佛往生」を最要とするとは直接的に説かれない。念佛往生が最要であると言うことを明らかにするのは『選擇集』の本文であり、そもそもこの章の内容によって、念佛が最要であることをあきらかにするのであるから、ここでの問いにおいて「なに故、念佛往生というのか。」という語はいささか突然であり、説明不足なのである。

そこで、この唐突すぎる設問がなされた理由を知るために、この部分の執筆時に参照されたであろう『無量寿経釈』について、同じ内容の部分を確認していくこととする。

### 『無量寿経釈』における三輩念佛往生の解釈

『選擇集』執筆以前の法然文献として、東大寺講説の「三部経釈」や『逆修説法』さらにはそれらの内容を記した手控え的資料が存在しており、それらを参照しながら『選擇集』が執筆されていたことは

既に様々な状況から間違いないことであろう。そしてこの第四章の内容にしてもその素的資料として、これらの参照された資料の存在を指摘できることは、筆者が既に明らかにしたところである。<sup>(4)</sup>中でも、廃助傍に関する部分は『無量寿経釈』が素的資料とされたと考えられる。まずは、その部分を見ていくこととする。

問う、今の三輩の文を見るに、念佛の外に諸もろの行業を説く。何ぞ唯だ念佛と謂うや。所以に上品の中に、念佛の外に出家・受戒・發心・修諸功德を擧げたり。中品の中に、念佛の外に菩提心及び齊戒等の善を説く。下品の中に、念佛の外に發菩提心を説く。何が故ぞ唯だ念佛往生と云うや。<sup>(5)</sup>

この問いをみれば一目瞭然、『選擇集』と同じ問いとなっている。<sup>(6)</sup>しかし『無量寿経釈』では「なにゆえ念佛と云うのか」という設問の根拠は明確である。それは、この設問が説かれる前の内容が「経の文に依つて念佛の行を積するなり。其の文に七あり。」<sup>(7)</sup>とある如く『無量寿経』に説かれる念佛に関する内容七処に関して順番に解釈していく中で、その第三に上輩、第四に中輩、第五に下輩とそれぞれに説かれる念佛についての解釈を記している部分であるからである。このことからここでの設問が「なにゆえ念佛と云うのか」というものであることは、何ら問題は無い。

では、その問いに対する答えであるが、『選擇集』においては善導の『観念法門』を引用して「三輩ともに念佛往生という」ことのみを明かしているのであるが、『無量寿経釈』においては、以下のような内容となっている。

答う。此の問最も然るべし。佛意測り難し。凡下輒く解し難し。然るに今、善導等の意に依つて、今此の文を案ずるに、略して二の意あり。一には但念佛往生、二には助念佛往生。一に但念佛とは、凡そ三品の義を論ずる事は、本一法に付いて之を論ず、九品の煩惱等の如し。今往生の行も、亦た然るべし。何ぞ必ずしも行の多少に付いて三品を論ぜん。故に今本願念佛の行に付いて、三品往生の旨を説くなり。何を以てか之を知る。三品の文に共に念佛に於いて一向の言を置けり。謂わく、上品に一向専念無量壽佛と説き、乃至下品に、一向専念無量壽佛と説く。凡そ餘所に准ずるに、一向と云ふは餘行を兼ねざる意なり。故に今念佛に付いて、三品を立て、品秩を分別するなり〔云云〕。此れも亦た私の義に非ず。故に善導の釋に云く、此の經の下巻の初めに云く、佛、一切衆生の根性の不同を説くに、上中下あり。其の根性に隨つて、佛皆勸めて専ら無量壽佛の名を念ぜしむ。其の人命終らんと欲する時に、佛、聖衆と與に自ら來迎したもう。釋の意に依つて、三輩共に念佛往生と云うなり。<sup>(8)</sup>

以上のように「なにゆえ念佛なのか」という問いの答えとして、佛意測り難しとしながらも、善導等の意として但念佛往生、助念佛往生の二義を挙げて、三輩段には諸行が説かれているものの、念佛には一向の語を記しているので、念佛のみの但念佛が三輩段の主旨であるとする義を明かしている。なお、二の助念佛往生については、「二に助念佛往生とは」と記す直接的な記述が見られない。おそらく、この辺りの文章に関しては、善導の『観念法門』の引用文が『選擇集』と共通

している、その後文章を含めて、後の時代に『選擇集』からの増広が行われてしまったのであろう。よって『無量寿経釈』本来の文章を語るとはあくまでも推測の域を超えないが、増広後の文章を見ても、内容的に但念佛に続けて助念佛往生に関する記述が記されていたことはまちがいないであろう。そこで、さらに続きを見ていくと、次に『無量寿経釈』独自の文章が出てくるのは、『選擇集』でいうところの「念佛を助成する為に諸行を説く」とする解釈の中、同類の助成、異類の助成についての部分からとなる。

初めに同類助成とは、前に善導の専修正行の中の助念是れなり。

前に委しく申し了んぬ「云云」。

二に異類の善とは、是れ往生要集の意なり。彼の集の中に十門を立て、念佛往生を釋す。且く其の中の第四は正修念佛、第五は助念方法なり「云云」。正修念佛とは、此れに五念門あり。其の中の第四觀察門は正しく是れ念佛門なり「云云」。助念方法に七あり。其の七とは「云云」。且く第七の惣結要行に、問うて云く、上諸門中等「云云」。此の義は即ち今の經の意に似たり。此れは即ち異類の善根を以つて、念佛を助成するなり。彼の集の意、念佛を助くるを以つて決定往生の業とすと「云云」。能助に随わば、諸行往生と謂うべし。今は且く所助に隨い、此れを以つて亦た念佛門とす。<sup>10)</sup>

『無量寿経釈』の原初形態において、内容的に見ておそらくこの部分が助念佛往生の解釈部分となるであろうと推測されるが、同類、異類と分ける解釈は『選擇集』と共通するものの、異類の善根の解釈に

おいては、『無量寿経釈』では全てを『往生要集』の解釈に依っているが、『選擇集』では内容的に『往生要集』の解釈を用いながらも、上中下の三輩に分けて解釈しているという異なりが見られる。

ここまでの記述に関しては、『無量寿経釈』から『選擇集』へ、「但念佛往生、助念佛往生」から、「廃諸行帰念佛、念佛助成」という言葉の違いはあるものの、同じ概念が記されていることから、二つの文献のつながりを見ることが出来る。またさらに、その内容についても何ら問題無く理解することが出来る。ところが、次の第三の「念佛と諸行」とに約して、各おの三品を立つ」部分に関しては、『無量寿経釈』と『選擇集』とで、文章構成の違いが見られるのである。<sup>11)</sup>そこで、それらを詳しく見ていくが、まずはその内容を確認しておく。

三に念佛と諸行とに約して、各おの三品を立つとは、今の文の中に菩提心及び造像等の諸もろの善根は、餘經に准ぜば、各おの是れ一の往生の業なり。然れば則ち此の文は、菩提心の諸もろの善根に約して、各おの三品を立て、往生を明かすなり。謂わく、且く菩提心について、上品あり、中品あり、下品あり。上品の發心を以つて上品の業とす。乃至下品の發心を以つて下品の業とす「云云」。菩提心已に然なり、造像等亦た是くの如し。故に知んぬ、此の文は諸行に付いて三品に分つと云う事、是れ亦た私の義に非ず。往生要集の中に此れ等の文を引いて、亦た諸行往生の證と為す。故に亦た此の解を作る。しかのみならず、善導の觀經疏に、復た有三种衆生の文を釋するに、粗此の義を見たり「云云」。<sup>12)</sup>このように『無量寿経釈』では、まずは、諸行について、三輩それぞ



れに上中下の別はあるものの皆往生行であることを説いている。

これに続けて念佛について三輩の別を挙げるのであるが、以下のよう内容となっている。

念佛に約して三品を立つとは、往生要集の中に此の三品の文を引いて念佛往生の證據とす。其の意之れに同じ。是れ則ち但念佛往生の義なり。

問う、念佛の一法に付いて、何ぞ三品を分つ。

此れに且く三義あり。一には返數の多少に約す。二には時節の長短に約す。三には觀念の淺深に約す。

一に返數に約して分つとは、善導の釋に云く、毎日三萬返は上品の業なり「云云」。之れを以つて之れを案ずるに、二萬は中、一萬は下なり。是れ則ち返數の多少に約して三品を分つの義なり。九品之れに准ずべし。

二に時節に約すとは、源信僧都の彌陀經の記の中に、彼の經の七日の念佛を以つて上品とす。彼に因つて之れを准ずるに、或いは十日の念佛を以つて上々品と為すべし。これ即ち一往時節の久近に約して三品を分つなり。九品之れに准ずべし。

三に觀念の淺深に約すとは「云云」。

之れ以つて之れを案ずるに、今の文も念佛に付いて三品を立つるなり。

之れに依りて之れを案ずるに、今の三輩の文に、但念佛の義あり、助念佛の義あり、亦た諸行往生の義あり。佛、一音を以て説法を演ぶに、衆生類に隨つて各おの解することを得「云云」。佛意は

多含なり。今且く三解を作る<sup>(13)</sup>。

このように、念佛を三種に分けていることについて、まずは、『往生要集』を根拠として、三輩ともに但念佛往生の義であるとを明かし、さらにその理由を問答形式で三つの義として明かしている。そして『無量寿經釈』はその後に傍正の義を説いて、上輩に説かれる念佛に関する解釈を終えている。

ここで、一つの疑問が生じる。それは、やはり『無量寿經釈』においても「三品に分かつ」ということを説く理由がわからない。わざわざ、諸行と念佛が三輩ともに分けられ記されていること解釈する目的はなんなのであろうか。

そこで、次にこの疑問の究明を行い、それを踏まえた上で『無量寿經釈』における三輩念佛往生の解釈をまとめてみる。

### 『無量寿經釈』における三輩念佛往生の理解

まず、これまで見てきたことを踏まえて、『無量寿經釈』における三輩念佛往生の解釈を振り返れば、

- ・但念佛往生義と助念佛往生義に分ける。
- ・助念佛往生義を同類の善根、異類の善根に分ける
- ・異類の善根は、念佛側から見れば助念佛であるが、単独でみれば諸行往生義である。
- ・そして、諸行と念佛に三品の区別があることを明かす。

以上のごとくにまとめられる。

やはり、最後の三品に分けることを明かす理由が不明確である。現存する『無量寿経釈』をみれば、但念佛往生義を説いた後に、『選擇集』からの増広部分が続く為、『選擇集』の第四章と同じく、二つ目の問答が存在している。その問答に於いて、廃、助、そして三品に分けるといふ義が説かれるのであるが、『無量寿経釈』だけで考えれば、但念佛の説明を先に述べた後、再び廃諸行帰念佛の解釈を重複して記すことは考えられない。よって、『無量寿経釈』の原初形態には第二問答は存在していなかったと考える。そこで、再度、『無量寿経釈』における三輩念佛往生の解釈部分を見てみると、

①問、三輩ともに諸行を説くが、何故念佛といふのか。

②答、但念佛往生義と助念佛往生義によつて解釈できる。

③但念佛往生義の解釈

※この後に『選擇集』からの増広部分が記されるが、原初形態では存在しない。

④助念佛往生義について同類の善根、異類の善根として解釈

⑤異類の善根は助けられる側である念佛から見れば助念佛であるが、単独で見れば、その行は単に諸行往生義である。

このような次第で記されていたと考えられる。そして、その後「念佛諸行について三品に分ける」解釈が続くのであるが、『選擇集』からの増広によつて、第二の問答の中、第三義として記されてしまう。今一度その部分を確認すると

三に念佛と諸行とに約して、各おの三品を立つとは、今の文の中に菩提心及び造像等の諸もろの善根は、餘經に准ぜば、各おの是

れ一の往生の業なり。然れば則ち此の文は、菩提心の諸もろの善根に約して、各おの三品を立て、往生を明かすなり。<sup>14</sup>

このように、現存の『無量寿経釈』では「三に」と記されていることから「三品に分ける」ことに対する解釈部分が第三義となつてしまっているが、もし、仮に、引用の傍線部分「三に念佛と諸行とに約して、各おの三品を立つとは、」という文が後の挿入であり、原初形態になかったとするならば、その直前の文章である、

能助に随わば、諸行往生と謂うべし。今は且く所助に随ひ、此れを以つて亦た念佛門とす。<sup>15</sup>

という異類の善根の解釈部分の最後の文に続けたならば、この諸行を三品に分けるといふ部分が、諸行往生義の解釈部分として理解できる。このように考えれば、但念佛往生の解釈の重複や三品に分けることを明かす不明瞭な意図の問題を解決できるのではないだろうか。

しかし、現実的に『無量寿経釈』において「念佛諸行を三品に分ける」ことに対する解釈は見られる。それを如何に考えるかの答えが、但念佛往生義を記す以前の『無量寿経釈』の文章に見られるのである。

三には三輩中、上輩一向専念無量壽佛とは、上に二文を以つて念佛往生の義を明かすと雖も、未だ其の品秩を分たず。故に今、一の念佛を開いて三品と為て、以つて其の品秩を分つ。此れに二の意有り。一には念佛往生に付いて三品有り。中下を捨てて上品を欣はしめんが為に品秩を分つ。二には行者をして自らの念佛の位の分齊を知らしめんが為に。

一に中下を捨てて上品を欣はしむとは「云云」。

二に次位を知るとは「云云」<sup>16)</sup>。

この文章が『無量寿経釈』における「上輩に説かれる念佛」に関する  
 解釈の最初の部分である。内容を見れば、『無量寿経』においては三  
 輩段で念佛が三品に分けられるが、それに二義ありとして、「上品を  
 願うべきであることを明かす為」と、「自身の分際を知ること」を明か  
 す為」とを記している。残念ながらその詳細な解釈について現存資料  
 は皆「云々」で終わっているが、これらの解釈の続きとして念佛、諸  
 行に三品あることを明かすことは何ら問題無いことであり、また、そ  
 の目的も、上品を願うべきで有り、自身の分際を知る為にこれらの内  
 容が説かれたと考えれば、その主旨も明確に受け止めることができる  
 であろう。つまり『無量寿経釈』において「念佛諸行について三品に  
 分ける」解釈については、但念佛往生義と諸行往生義を明確にする為  
 と、三品の中では上品を目指すべきことを明らかにする為、さらには  
 自身の分際を知るために記された。このように考えることによつてこ  
 こでの意図を明確にすることができるのである。

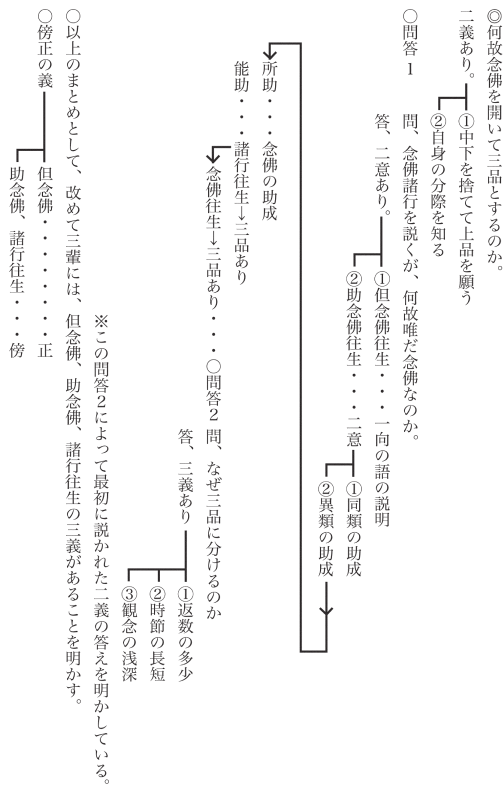
そして、『無量寿経釈』では最後に傍正の義を説く、  
 之を以つて之を案ずるに、今の文も念佛に付いて三品を立つるな  
 り。

之に依りて之を案ずるに、今の三輩の文に但念佛の義あり、助念  
 佛の義あり、亦た諸行往生の義あり。佛以一音演説法衆生隨類各  
 得解「云云」。佛意は多含なり。今且く三解を作る。  
 次に此の三義に付いて傍正を論ずるに、但念佛を以つて正と為し、  
 餘の二を傍と為す。何を以つての故に、佛の本願に准ずるが故に、

前後の多文に依るが故に「云云」<sup>17)</sup>。

このように三輩念佛往生義の總結として、但念佛往生義、助念佛往生  
 義、諸行往生義の三義をまとめて「但念佛を以つて正と為し、餘の二  
 を傍と為す。」という傍正の義が記されるのである。  
 以上の内容を簡略に纏めると以下ようになる。

『無量寿経釈』に説かれる念佛七処文の中、第三の三輩、上輩の文の解説



以上のような理解によつて『無量寿経釈』の三輩念佛往生義は明確に  
 理解することができるのである。『選擇集』第四章の如きの不明瞭さ  
 は全く見られない。<sup>18)</sup>



## 『逆修說法』における三輩念佛往生

では次に、法然遺文の中でも一つ三輩念佛往生について明かしている『逆修說法』についてもその内容を確認しておくこととする。まずは、該当本文を引用しておく。

次に往生の業因は、念佛の一行を定むと雖も、行者の根性に隨いて上中下有り。故に三輩の往生を遂げたり。即ち上輩の文に云く、其の上輩は家を捨て欲を棄て、しかも沙門となり、菩提心を發して、一向に専ら無量壽佛を念ず。〔云云〕中輩の文に云く、行じて沙門となること能わすと雖も、大いに功德を修して、當に無上菩提の心を發して、一向に専ら無量壽佛を念ずべし。下輩の文に云く、功德を作し修すこと能わざるも、當に無上菩提の心を發して、一向に意を專にし、乃至十念、無量壽佛を念ず。〔云云〕當座の導師、私に一釋を作り候。此の三輩の文の中に菩提心等の餘行を擧ぐと雖も、上の佛の本願の意に望むれば、衆生をして一向に専ら無量壽佛を念ずるに在り。故に一向と云う。

即ち又、觀念法門に善導釋して曰く、此の經の下巻の初めに云く、佛説きたまわく、一切衆生の根性は不同にして上中下あり。その根性に隨つて、佛皆勧めて専ら無量壽佛の名を念ぜしむ。其の人命終らんと欲する時、佛聖衆とともに自ら來りて迎攝して、盡く往生を得せしめたもう。〔已上〕此の釋の心は、三輩俱に念佛往生なり。

誠に一向の言は、餘を捨つるの詞なり。例せば、五天竺の三の

寺の如し。一には一向大乘寺、二には一向小乘寺、三には大小兼行寺、此の一向大乘寺の中には小乘を學すること無し。一向小乘寺には大乘を學すること無し。大小兼行寺の中には大小乗俱に兼學するなり。大小の兩寺には俱に一向の言を安く。二を兼ねたる寺には、一向の言を安かず。之を以つて意得候に、今經の中、一向の言も亦爾なり。若し念佛の外に餘行を兼ねば、即ち一向に非ず。彼の寺に准ずれば兼行と云うべし。既に一向と云う、餘行を捨つということを知るべし。

但、此の三輩の文の中に餘行を説くに就いて、三の意有り。一には諸行を捨てて念佛に歸せしめんがために、並べて餘行を説き、念佛に於いて一向の言を置く。二には念佛を助けんが爲に諸善を説く。三には念佛と諸行とに三品の差別有ることを並べ示さんがために諸行を説く。此の三義の中には、但、初めの義を正となし、後の二は傍義なり。<sup>19)</sup>

このように、三輩に念佛と諸行とが説かれるが、その理由として善導の釈義を用いて、念佛を勧める為であるとし、『觀念法門』の引用、さらには一向の語の説明など、『無量壽經釈』の内容と相違しない。さらに、三の意ありとして、捨諸行帰念佛の義、念佛の助成の義、三品に差別があることを明かす義とを記し、その三義について、傍正の義を明らかにしている。ここで注目すべきは第三義が「三には念佛と諸行とに三品の差別あることを並べ示さんがために諸行を説く。」となっていることである。単に念佛と諸行が三輩それぞれに説かれてそれぞれ三種有るということではなく、「差別」という語を用いて、三

種の区別をつけていることである。これは『無量寿経釈』において三輩念佛往生義の全体の解釈として、三輩の念佛に区別をもうけ上輩を旨指したり、自身の分際を知るという目的と共通するものである。

以上の内容を簡略に纏めると以下になる。

# 『逆修説法』に説かれる三輩念佛往生の解説

○念佛に上中下の区別が有り、三輩それぞれに説かれることを明かす。

← ○三輩の中に余行を説くが、佛の本願に望めば念佛が大切。故に一向という（『観無量寿経』による）

← ○「この釈の心は、三輩供に念佛往生なり・」（善導『観念法門』による）

← ○一向の語の解釈 五天竺の三寺（一向大乘寺・一向小乗寺・大小兼行寺）

← ○三輩の中に余行を説く理由。三義

- ①持諸行・帰念佛
- ②念佛を助ける為
- ③三品に差別有ることを明かす為

← ○傍正の義・・・右の三義の中

- ①が正
- ②と③が傍

以上のように、『逆修説法』における三輩念佛往生の解釈は、文章の量的には『無量寿経釈』に及ばないものの、一向の解説での五天竺の記述や、廃諸行帰念佛等の三意の記述などは『選擇集』第四章の内容と共通しており、より近いものであるといえるだろう。

つまり、『無量寿経釈』『逆修説法』の双方、あるいはその双方の内容を記した手控え的資料を参照しながら『選擇集』第四章が執筆されていったことは間違いないであろう。

## 「廬山寺本」に見る『選擇集』第四章の執筆状況の検討

そこで、これらの素的資料の検証を踏まえて『選擇集』第四章の理解を試みていくが、その前にもう一段階、確認しておかなければならないことがある。それが『選擇集』の草稿本である「廬山寺本」に見られる執筆状況の確認である。「廬山寺本」ではこの第四章においてもいくつもの文章の挿入や削除といった書き込みが存在している。ここでは、それらを検証すること、で、『選擇集』第四章の主旨を探るべくその手がかりを求めてみたい。

「廬山寺本」における第四章の紙面において、『無量寿経』の三輩段引用部分は、全く書き込み等が見られない。しかし、私釈段に入ると様々な書き込みが登場し、第四章が完成するまでの執筆作業の痕跡を見ることが出来る。それらの作業は実に生々しく当時の状況を明らかにしてくれるものである。例えば、私釈段冒頭の設問の部分を見てみると、（図1参照）

図1 「廬山寺本」三十三丁表

私問曰見上輩文念佛之外亦有力捨家  
棄欲不餘行見中輩文亦有力起三三  
像不餘行見下輩文亦有力起三三

(原初形態)

私に問うて曰く、上輩の文を見るに、念佛の外にまた捨家棄欲等の余行有り。中輩の文を見るに、また起立塔像等の余行有り。下輩の文を見るに、また菩提心等の余行有り。何が故ぞただ念佛往生と云うや。

(訂正後)

私に問うて曰く、上輩の文の中に、念佛の外にまた捨家棄欲等の余行有り。中輩の文の中に、また起立塔像等の余行有り。下輩の文の中に、また菩提心等の余行有り。何が故ぞただ念佛往生と云うや。

ここでは、初め「上輩の文を見るに」と記していたものを、後の訂正によって「上輩の文の中に」と直している。これらの訂正は上中下輩の全てにおいて行われており、『選擇集』の文章校正を行った、まさにその当時の状況がそのまま伝わった例であろう。このような書き込みが私積段全体を通していくつも見られるのである。ところが、『逆修説法』とほぼ同じ文面である「一向」に関する解説文で「五天竺」を例に挙げて解釈する部分には全く書き込みが存在しない。つまり、この状況を考えれば、執筆時に何らかの資料を参照しながら、そのまま書き写す箇所と、文章を考えながら執筆された箇所が存在しており、その状況の違いによって訂正の痕跡である書き込みの有無が見られるのであろう。

このように「廬山寺本」の紙面に残された作業の痕跡によって、執筆当時の状況を知ることができるのであるが、単に文字の訂正跡を知るだけでなく、中にはその訂正の意図を知ることができる部分も存在

している。それが、第二の問答において三意を説く部分である。まずは、「廬山寺本」の状況を確認する。(図2参照)

図2 「廬山寺本」三十四丁表

念佛子答曰此三意一、發諸行、  
念仏二、助成念仏、三、發諸行、  
諸行二門、各三、一、發諸行、  
者難、二、善導、三、發諸行、  
散由門之、發諸行、  
向事、發諸行、  
上輩之中、難、發諸行、

(原初形態)

問うて曰く、この尺いまだ前の難を遮せず。何ぞ余行を棄てて、ただ念佛と云うや。

答えて曰く、これに三の意有り。

一には諸行を廃して、念佛に帰せしむ。

二には念佛を助成せしめんが為に、此の諸行を説く。

三には念佛と諸行の二門に約して各三品を立つ也。

(訂正後)

問うて曰く、この釈いまだ前の難を遮せず。何ぞ余行を棄てて、ただ念佛と云うや。

答えて曰く、これに三の意有り。

一には諸行（於いて）を廢して、念佛に歸せしめんが為に、而も諸行を説く也。

二には念佛を助成せしめんが為に、而も諸行を説く也。

三には念佛と諸行の二門に約して（為に）各三品を立てんが為に、而も諸行を説く也。

ここでは、数回に及ぶ訂正が行われており、三意全てを「而説諸行也」という語で統一することで、三意の文章形態を揃える校正が行われているのである。この訂正は、後に三意を個々に解説する場面においても、同様の訂正、挿入が行われている。この訂正によって、三意全て「だから諸行が説かれているのだ」という意図に置き換えられたことになる。

しかし、ここでの設問を見ると、「何ぞ余行を棄てて、ただ念佛と云うや。」であって、「なぜ諸行を説くのか」という問いではない。つまり、この訂正によって文意が狂ってしまったのである。もともと問題無く理解できていた文章を訂正したことによって、問いに対する的確な答えとなっていない文章に改悪してしまったのである。

このことに関する、原因はこれまで本論において見てきた内容から容易に判断できる。それは、執筆時に参照されたであろう『逆修説法』の内容を見れば明らかである。今一度、その部分を見てみると、

但、此の三輩の文の中に餘行を説くに就いて、三の意有り。一には諸行を捨てて念佛に歸せしめんがために、並べて餘行を説き、念佛に於いて一向の言を置く。二には念佛を助けんが爲に諸善を説く。三には念佛と諸行とに三品の差別有ることを並べ示さんのために諸行を説く。此の三義の中には、但、初めの義を正となし、後の二は傍義なり。<sup>20)</sup>

このように、『逆修説法』では三意を明かす元となる内容が、「三輩の中に余行が説かれていることについて」ということとなっている。つまり「廬山寺本」は、初め「なぜ念佛往生なのか」という主旨で記されていたものを、この『逆修説法』の内容に合わせるために答えの部分のみ「而も諸行を説く」という語を挿入し、文章を改めてしまった。このことで、問いと答えとの整合性を失ってしまったのである。

以上の例を見る限り、『選擇集』の執筆は決して完璧な準備の下で行われたとはいえない状況が伺える。『無量寿経釈』や『逆修説法』といった過去の資料を参照しながら、一つ一つの文章をまとめていく中で、決して完成された文面ができないままに執筆され、さらには、校正作業を経た後であっても、未だ明確に主旨となる教義を明かしきれなかった部分も残ってしまったのである。<sup>21)</sup>このような状況を踏まえた上で、第四章に於いて最も理解が困難な傍正の義について、以下に見ていくこととする。

## 傍正の義の理解

『選擇集』第四章において、最も難解な部分がこの傍正の義とそれにかかる「念佛諸行に訳して、各三品を立てんが為に、諸行を説く」という部分である。今一度その部分の概略を整理して記しておく、

三輩段に念佛と諸行が説かれることについて、三つの意を明かす。初めの「諸行を廃して、念佛に帰す意」と「念佛の助けとなる為に諸行が説かれているという意」に関しては、その主旨を問題無く理解できる。ところが、第三の「念佛諸行に約して、各三品を立てんが為に、諸行を説く意」については、その主旨をそのまま理解できない。さらに、この第三の意には傍正の義という解釈が加えられるため、ますますその理解を難解にしている。

では、いったいどのような理由によって難解になってしまったのであろうか。その原因について一つ一つ紐解いていき、この部分の明確な主旨を説明していくこととする。

まず、1つめの問題点。問いに対する的確な答えとなっていない点。そもそもこの文章が記される背景には、「なんぞ余行を捨てて、ただ念佛と云うや」という問いがある。その答えとして三意が説かれるが、その第三の意として「念佛と諸行の二門に約して各三品を立てんが為に、諸行を説く。」が説かれる。その意味は、念佛と諸行にそれぞれ三種を立てるために諸行を説いているということであり、文意も曖昧である上に、それだけでは到底問いに対する答えにはなっていない。また、先に述べた「廬山寺本」の原初形態の「念佛と諸行の二門に約

して各三品を立つ也。」であっても、答えとしては成立していない。これが一つめの問題点である。

これについては、先の『無量寿経釈』における同内容の記述の解釈に随うならば、三品の区別を明かすことによって三輩の差別を明らかにし、そこから、上品を目指すことと、自身の分際を知ることであった。このことは『逆修説法』においても「三品の差別を明かす」としており、主旨は共通している。つまり『選擇集』でも同様の主旨を当てはめれば、「念佛と諸行に三種を立てる」その意図が明確にできると考えられる。

二つめの問題点は、念佛・諸行双方の解釈に説かれる『往生要集』の引用文である。

念佛に約して三品を立つ部分の解釈においては、

『往生要集』の念佛証掘門に云く、『双卷経』の三輩の業、浅深有りといえども、しかも通じて皆一向専念無量寿佛と云う。」「感師これに同じ。』<sup>23</sup>

とあり、諸行門に約して、三品を立つ部分の解釈においては、

『往生要集』の諸行往生門に云く、『双卷経』の三輩も、またこれを出でず。」「已上」<sup>24</sup>

とある。いずれも単に三輩それぞれに念佛、諸行が有るということの証明として引用されているようであるが、前後の説明が不十分であり、かつ、短い引用文で有るため、なぜ、これらを引用したのかという明確な理由を捉えにくい状況となっているのである。この問題に関してはおそらく『無量寿経釈』等の『選擇集』執筆時に参照された資料



に、この『往生要集』が記されていたのだと考えられるが、そもそも問答の答えとして成立していない内容の補足として引用されているため、全く意味をなさない引用となってしまうたのであろう。『無量寿経釈』における但念佛往生義や諸行往生義の如きの主体となる解釈があつたならば、これらの引用文が補足としての意義を果たすものと考えられるが、『選擇集』においては、念佛と諸行それぞれに三種を立てるという内容のみであるため、此等の引用文を付加しても何ら意味をなしていない。

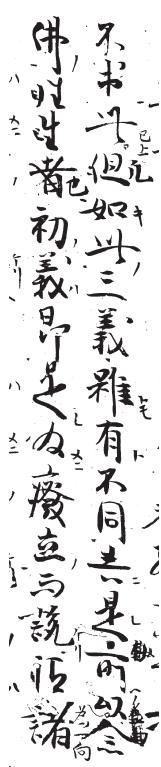
三つめの問題は、第三の意を説いた後、そのまとめを記す部分において、

およそかくのごときの三義、不同有りといえども、ともにこれ一向念佛の爲にする所以なり。<sup>24</sup>

とある部分である。ここで云う「三義」とはこの直前に記される「三つの意」のことであろうが、これらの三意が「一向念佛の爲にする所以」という文章も聊か主旨の捉えにくいものとなってしまうている。

「廬山寺本」の原初形態においては、「一向念佛の爲」の部分が「念佛往生」とのみ記されている。(図3参照)

図3 「廬山寺本」三十七丁表



(原初形態)  
但しかくのごときの三義、不同有りといえども、ともにこれ念佛往生の所以とは、

(訂正後)

凡そかくのごときの三義、不同有りといえども、ともにこれ一向念佛の爲にする所以なり。

この執筆当初に「ともに念佛往生の所以とは」と記していたことに注目するならば、先に見られた善導の『観念法門』の引用後に記される「この釈の意に依るに、三輩ともに念佛往生と云うなり。」<sup>25</sup>という内容と一致する。つまり、ここでの「かくのごときの三義」とは諸行を廃することや念佛を助成するといった三義ではなく、その元である三輩自体を指していたのではないだろうか。現に『無量寿経釈』や『逆修説法』においては、三輩に差別を認め、それぞれを区別している。つまり、この一文においても、参照された資料から執筆する際に前後の文章とのつながりなどから、主旨を変えて記されてしまった部分であると考えられる。

そして最後四つめの問題は、傍正の義である。

後の義は、すなわちこれ傍正の爲に説く。謂く、念佛諸行の二門を説くといえども、念佛を以て正と爲し、諸行を以て傍と爲す。<sup>26</sup>

この文章の意味を捉えるならば、後の義とは先の三意の最後の義のことであり、「三には念佛と諸行と俱に三品の差別あることを並べ示さんがために諸行を説く。」を指すことは間違いない。だとすれば、そ

の第三の意の何に傍を当てはめ、何をもつて正とするのであろうか。教義的な解釈を踏まえれば、念佛と諸行とが説かれているのだから当然、念佛が正で諸行が傍ということになるであろう。しかし、この『選擇集』の文章だけを見た場合、いったいどこにそのことを断定できる文章が存在するのであろうか。現に第三の意とは、念佛と諸行について、ただ単に三品を立てると言う事だけであり、その優劣を記しているものではない。つまり、そこに傍正の義を当てはめることは全く以て理解できないのである。

この原因を探れば、ここでも『無量寿経釈』や『逆修説法』の内容を参照して執筆されたことによる、文脈の取り違いや主旨の改変によっておこったミスであると考えられる。

実際、『無量寿経釈』『逆修説法』の二つの文献においては、明確な傍正の義が記されており、『選擇集』においては、その解釈が全く反映されていない。よって、『選擇集』における傍正の義は、文章をそのまま理解するのではなく、他の内容から教義的理解を踏まえて上で判断しなければならない状況となっているのである。

以上、四つの問題点を検討した上で、第三の意の理解を試みるならば、『選擇集』の文面に見られる「念佛と諸行との二門に各おの三品がある」という意味だけで無く、その背景に、『無量寿経釈』や『逆修説法』の内容の如く、その三品には上中下の差別が有り、目指すべきは上輩である。また、その差別を見ることで自身の分際を知り、阿弥陀佛への帰依を深め、より多くの念佛を唱えることを目指そうと説く部分であるという理解をすべきであると考ええる。そして、このよう

な理解をすることによってこの部分の主旨が明確になり、それを踏まえた上であれば、第三の意に傍正の義が当てはめられることを理解できるのである。

なお、この廃助傍の三義を明かした後に今一度、三義の優劣を問う文が記されている。

故に三輩通じて皆念佛と云うなり。ただしこれ等の三義、殿最知り難し。請う、諸の学者、取捨心に在るべし。今もし善導に依らば、初めを以て正と為すのみ。<sup>27</sup>

この文については、『選擇集』の文章だけを見れば意味は問題無く捉えることができる。しかし、念佛と諸行を比較した廃助傍の三義に対して、さらに殿最、つまり優劣をつける必要があるのであろうか。善導によれば初めを以て正と為すという文についても、その根拠となるものを明確に記すことも無い。また『無量寿経釈』や『逆修説法』においても、三義の優劣を設ける記述が見られるが、それは三輩の区別や但念佛、助念佛、但諸行に対する優劣であり、その優劣こそが傍正の義である。つまりそれらのことを考えれば、やはりここでの三義殿最の不同とは、念佛と諸行を比したもので有るべきであり、善導が「初めを以て正と為す」とされる、これこそが本来の傍正の義と捉えるべきであろう。

## まとめ

以上の如く『選擇集』第四章三輩段について、その内容の理解を求

めて検証してきたが、現状の『選擇集』における難解な部分に関しては、執筆時の参照資料の用い方に問題が有ることを指摘した。つまり、執筆時に参照された『無量寿経釈』や『逆修説法』、あるいはそれらの教義的内容が記された手控え資料を元に、文面そのままを書き写したり、文章を書き換えたり、さらにその作業を幾度も繰り返したりというような複雑な執筆作業を行ったため、文章を訂正した部分では、その文の主旨が変わり、そのことで前後の文章とのつながりも途切れてしまうなどの重大なミスが生じてしまった。そしてそのような例を数カ所見いだせることも分かった。よって、現状の『選擇集』の文章をそのまま理解する為には、『選擇集』執筆以前の文献から法然の念佛教義を知り、それを前提として踏まえた上でないと明確な主旨を得られない状況となっていると考える。

そのような教義的前提を踏まえた上で、現状の内容を見てみると、『選擇集』第四章には、「三輩段に各々念佛と諸行が説かれる」ということのみが記されているが、本来の法然の教義的前提を踏まえれば、そこに「三輩の差別」について記す必要があったことが分かる。抜けてしまった理由については、第五章念佛利益章にも三輩に関する内容が説かれることが関係していると考えられるが、この「三輩の差別」という概念を付加することによって、第四章の内容を明確に理解できるのである。

そこでその旨を付加して第四章三輩段の内容を纏めると、この章の主旨は二つの問答によって、「三輩段に念佛と諸行が説かれるが、浄土往生の立場からすれば念佛往生のみを用いるべきであり、さらにそ

の三輩の差別を知り、己の機と照らしあわせ、機に叶った念佛を分別すべきである。」ということを示すものであり、念佛と諸行とを「廃立の義・助正の義・傍正の義」に位置づけ、三輩段全てに於いて勧められる一向念佛往生こそが、最要とすべき教えであることを示されているということが述べられたものとして理解できるであろう。

よって、最後にこの章の章題である「三輩念佛往生之文」の理解を示しておく、現状のままの章題をそのまま理解するならば、その意味としては、『無量寿経』に説かれる七つの念佛に関する記述の中、三輩に記される念佛往生についてまとめた章」というような意味と受け止めることができるであろう。そして、もし他の章の如く、章の内容に沿った文章として第四章の章題をつけるならば、

「三輩雖説念佛諸行一向念佛願往生之文」

（三輩は念佛と諸行を説くと雖も、一向に念佛して往生を願うべきの文）

といったタイトルになるであろう。

# 註

(1) 『選擇傳弘決疑鈔』巻第一、良忠著、(『浄土』七巻一九一頁上段。)参照。

※なお本論文においては、便宜上、引用文は基本的に書き下した状態で引用することとする。

- (2) 聖典版『選擇本願念佛集』一二五頁六行目
- (3) 聖典版『選擇本願念佛集』一二五頁一四行目
- (4) 拙稿『廬山寺蔵『選擇集』の原資料をめぐって——第四章を中心として——』『佛教論叢』(四十五号、平成十三年四月 浄土宗教学院)

(5) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 八八頁八行目）  
(6) 現存する『無量寿経釈』には後に『選擇集』から書き加えられた部分が存在しているが、ここでは意味は同じであるが、文章が異なっているため、増広された部分ではないと考えられる。

(7) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 八七頁八行目）  
(8) 聖典版『選擇本願念佛集』 一二五頁八行目参照。

(9) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 八八頁一〇行目）

(10) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 八九頁一二行目）

(11) 『無量寿経釈』において、この第三の義を記す部分は『選擇集』と文面が異なる部分である。よって古層、つまり原初形態より存在していた部分であると考えてよいだろう。

(12) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 九〇頁一行目）

(13) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 九〇頁六行目）

(14) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 九〇頁一行目）

(15) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 八九頁一八行目）

(16) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 八八頁四行目）

(17) 『無量寿経釈』 寛永九年版（『昭法全』 九〇頁一三行目）

(18) 『選擇集』においては、念佛に三品を立てる理由として挙げられる返数の多少、時節の長短、観念の浅深の三義のうち、観念の浅深と返数の多少（念佛の多少）の二義が第五章に記されている。第五章は念佛の利益を説くものであり、三輩の差別を明かして、機に随った分別を求める内容となっている。つまり『無量寿経釈』における三輩念佛往生の解釈が、『選擇集』においては二つの章に分けて説かれているのである。

(19) 『逆修説法』 五七日（『昭法全』 二六七頁一行目）

(20) 『逆修説法』 五七日（『昭法全』 二六七頁一〇行目）

(21) 第四章の私釋段において「廬山寺本」での訂正の有無に関わらず、内容的に問題がある部分はいくつか存在していると考ええる。本論文の

内容とは直接関係ないが、問題が有る例としては、同類の助成を明かす中に見られる「五種の助行」という語である。「善導和尚の『観經の疏』の中に、五種の助行を挙げて、念仏の一行を助成すこれなり。つぶさには上の正雜二行の中に説くがごとし。」とあるが、この箇所は、なんの書き込みもなされていない箇所、そのまま現在も『選擇集』本文となっている部分である。しかし、そもそも内容的には同類の助成の解釈は「つぶさには」と有る如く第二章の五種正行を指しているとしているが、第二章に「五種の助行」という語は見られず、五種正行の概念からすれば、第四の称名正定業に対して四種の助業が記されているのみである。このことに対して良忠は『決疑鈔』において「五種助行と者、謂く、讚歎供養を開して二行と爲る意なり。」として、讚歎・供養を分けた六種正行を採用したために五種の助行となったと解釈している。この解釈は多くの注釈書類が採用しているが、根拠が示されている訳でもなく、全くその意図が理解できない。つまり、「五種の助行」という言葉をそのまま理解するには無理があると考えられる。第二章の内容を見たならば、五種雜行という語は記されている。だとすれば、雜行と助行とを間違っして記してしまったのではないだろうか。しかし雜行と助行は別物である。つまり、この部分に関しても、先の「而説諸行也」と同様、執筆時の単なるミスによるものと考えてもよいのではないだろうか。

(22) 聖典版『選擇本願念佛集』 一二七頁一五行目

(23) 聖典版『選擇本願念佛集』 一二八頁三行目

(24) 聖典版『選擇本願念佛集』 一二八頁五行目

(25) 聖典版『選擇本願念佛集』 一二五頁一二行目

(26) 聖典版『選擇本願念佛集』 一二八頁八行目

(27) 聖典版『選擇本願念佛集』 一二八頁一〇行目

（かねいわ かずひろ 転法輪寺住職）